

5月16日 ルカによる福音書24章44～53節 今日の説教から
説教題：「イエス様との別れ」

突然ですが、「生」という漢字に、いくつ読み方があるか皆さまは知っているでしょうか。今日の説教要旨の裏面にいくつか載せてありますが、おそらく私たちが使う漢字の中で最も読み方が多い漢字ではないか、と言われています。例えば、最初の段には「生る（ある）」、「生憎（あいにく）」、「紙生里（かみあがり）」、「生明（あざみ）」など「あ」から始まる読み方があり、ほかにも、将棋の「羽生義治九段」のように「はぶ」と読んだり、スケートの「羽生結弦」選手のように「はにゅう」と読むなど、同じ文字の並びで違う読み方があったりします。このように、この「生」という漢字には様々な読み方があるのですが、裏面に乗せているだけでも60個ほどもあり、それだけにとどまらず、最大で150個を超えると言われています。

それに対して、全く反対の意味である「死」には、たった一つしか読み方ありません。これが聖書に書かれている事ならば私たちは「必ず最後に待ち受ける一つの死」という点から神様の御手を垣間見るのがですが、あくまでもこれは「日本語」という言語の中だけのお話です。また、「死」という漢字の読み方は一つかもしれません、日本語の中で死は様々な言葉で表現されます。「死ぬ」「亡くなる」という言い方が一般的に使われますし、「逝去」「永眠」などは私たちがよく使う言い方です。ほかにも「他界」「往生」「世を去る」「旅立つ」などの言い方は、輪廻転生の考え方がある仏教などを土台にして使われているようです。古い言い方だと「儻くなる」「隠れる」「空しくなる」などの言い方もあります。このように比較してみると、死という漢字を使わない場合は特に、多くが私たちのもとから、またはこの世界から「別れる」「離れる」という意味をもって、人が死ぬことを表現しているようです。

今日の聖書箇所では、復活後にイエス様が40日間弟子たちの前に現れ、そして天へと昇っていく様子が記されています。これは直接の死ではありませんが、この時をもって弟子たちはイエス様に別れを告げることになります。しかし、イエス様によって「心の目」を開かれた弟子たちには、その別れが悲しいものではなく、むしろ「大きな喜び」に満たされたものであることが理解できていました。その喜びは、イエス様が教えてくれた復活が確かに自分たちにも起きる、という事をその開かれた心の目によって理解したからであり、神様から注がれる聖霊によってその喜びを世界中の人々に伝える大きな使命を、イエス様から託されたからなのです。

私たちは死によって別れを経験しますが、同時にイエス様によって「地に落ちた小さな種から多くの実がなる」ことも教えてもらっています。私たちは死をこえて、その先に大きな実りが待っていることを知っているのです。私たちのすべての言葉が「種」となり、隣人の信仰の実がなるように、もしくは私たちだけでは「種まき」まではたどり着けなかったとしても、私たちがこの地に生きて、キリスト者として生きるその姿を見せることによって、私たちは隣人の心を「耕す」ことが出来るでしょう。「イエス様を信じている人はこんな人なのか」と教えることによって、頑なであった心を耕し、いつかイエス様がそこに直接種をまいってくれることを期待することが出来るのです。日本の人口の中でクリスチヤンが1%もないような状況で、100人に99人は教会に行ったことがないようなその状況の中で、私たちが「特別」に神様を信じているのではなく、「すべての人」に対して神様が手を差し伸べてくれているという事を、私たちがイエス様を信じて「生きる」ことで知ってもらうことができるのではないかでしょうか。

イエス様の死が全世界の人々の命につながったように、イエス様との別れは全知に向けた宣教の始まりとなりました。私たちは、弟子たちが受けた聖霊を注がれて、聖霊の洗礼を受けて、次の一步を踏み出すことが出来ます。次の主日は聖霊降臨日、その聖霊の喜びに期待をしながら、今週一週間の歩みを共に進めていきましょう。